



学校教育目標 広い視野と豊かな心を持った、健康でたくましい生徒の育成

東中だより

圓 困 目 標

- ・健康でたくましい生徒
- ・人の心の痛みが分かり、思いやりのある生徒
- ・進んで学び、感動できる生徒
- ・規律を守り、責任を果たす生徒
- ・厳しさに耐え、自ら努力する生徒

「通信票」と「学力」①

通信票をお届けする時期となりました。生徒たちはこの1学期、学校生活や各自の生活に精一杯取り組み、それぞれ成長してきたと思います。保護者の皆様は、春先からこの夏までのわが子の成長の、どの部分を大切に思い、伸ばしていければよいとお考えでしょうか。

学校とご家庭、それらを取り巻く地域社会の皆様と手を取り合い、子供たちの健やかな成長を今後も後押ししていければよいと考えています。

整然とした校舎内



そこで今回と次号では、生徒たちの成長の記録である「通信票」と「学力」について考えてみたいと思います。少し専門的な話も入ってしまうかもしれませんが、生徒たちのため、少しお付き合いいただけましたら幸いです。

私（三枝）の専門は英語教育ですが、同じ英語の世界の人間として尊敬する英語学者で、数年前に故人となっていました渡部昇一さんという方がいらっしゃいます。その著書（『新・知的生活の方法 知の井戸を掘る 知の巨人が説く「考える力を継続する習慣」』 青志社 令和5年6月24日）の中に、次のような文章が記載されています。少し長いのですが、引用してみたいと思います。この中で、世界に今もなお大きな影響を与え続けている「進化論」を確立したダーウィンのことが述べられています。

■渡部昇一さん 略歴

・英語学者 ・上智大学教授、名誉教授 ・フルブライト留学生(アメリカの6つ大学にて教鞭) ・オックスフォード大学留学(同大学ジーザス・カレッジ寄託研究生) ・ドイツ・ミュンスタ大学哲学博士 ・イギリス国文学協会会長、日本・インド親善協会理事長等、各機関役職多数 ・著書多数

今回、「通信票」と「学力」ということを考えるにあたり、とても関係のあることが述べられていると思いました。

<引用>

深井戸が一つ、そしてそれに関連性の高い井戸をもう一つ掘る。それは、浅井戸でもかまわない。

渡部昇一

<まえがき>

「知的生活」とは何か
自分流の「生き方」を愉しむヒント（抜粋）

チャールズ・ダーウィンは、「人間にとって重要なのは、頭のよさよりも心の態度である」と言ったという。つまり、価値ある人生を送るために本当に必要なのは、学問の世界で言う頭のよさではなく、真剣にもの事を考え、一事専心する態度であると言いたかったのだろう。

各クラスの木。日常生活向上の成果や内容を木の葉として貼り付けていきます。



そのダーウィンであるが、小さい時は勉強ができなくて、才気煥発で賢い妹のほうが息子だったらよかったのに、と親から言われて育ったという。しかし、ダーウィンは自分が興味

を持ったことは納得するまで追究するというねばり強さを持っていた。そして、最終的には、あの生物の進化思想と自然淘汰説を明らかにした『種の起源』という、たいへんな学問的成果を残したのである。こ

壁一面、「学年の足跡」のアルバム

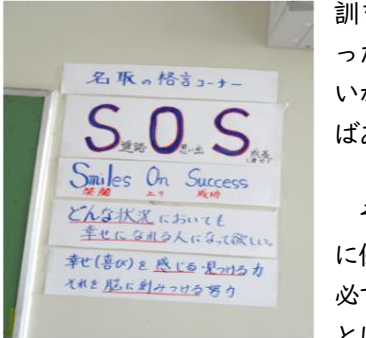
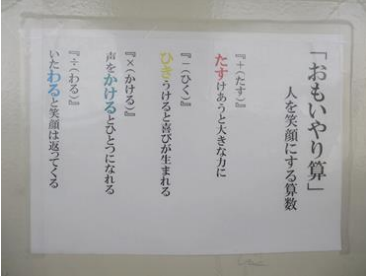


それは、それまでの人間の価値観を覆すほどの偉大な業績であった。

この話を、私は旧制中学時代に恩師の佐藤順太先生からうかがったのだが、その後の人生を考えていく時にたいへん参考になったことは言うまでもない。なるほど、いわゆる「カミソリのような頭」ではなくても、深い興味と探求心、自分の人生で一番大事なことを見極める力さえあれば、歴史的な業績をおさめることも不可能ではない—そんな希望を私に与えてくれたのである。

この話に深い感銘を受けたこともあって、私は学生時代をとおして、先生方や書物の中から、なるべく多くの教訓を得ようと心がけた。それは、言葉を換えれば自分の本当にやりたいことは何か、どんな人生を送りたいのかということ、真剣に考えていた、とも言えるだろう。

大切にしたい生き方を毎日ざりげなく示します。



そして、自分の好きなことをして身を立てていくのが夢であり、究極の幸せであり、そのためにこそ自分は生きているのだ、という確信を抱くようになった。(略)

さて、自分が大学の教師となり、学生を教える立場になってみると、私が若いうちに恩師や恩書から得てきた教訓を、彼らにも与えてやったほうがいいのではないかと思うことがしばしばあった。

それは、大学でも非常に優秀で頭のいい学生が、必ずしも学問の道に入るとは限らないし、入った

としても必ずしも業績を上げられないのを見てきたからだ。そうすると、これは「頭の知能指数」の問題ではなくて、自分のための人生をどういうふうと考えていったらよいか、という心術を知らないこ

とに起因しているのだと確信したのである。

現在は、自分の好きな道を誰もが自由に選べる時代である。可能性は無限にあると言ってもよい。だから、自分の関心を広く豊かに持ち続け、自分の心の声に耳を澄まし、きちんとものを考えながら生きてほしい。心の底から自分の夢の実現を願い、常にそのことを考え続けていけば、それがいつどういいう形で相乗効果を起こすかもしれないからである。(略)

不幸なことに、どうしても今の日本では、何をやりたいかという夢や希望が、子供の時から抑えられてしまいがちだ。そして、幼稚園、小中学校はどこがいい、高校、大学はどこがいい、と親が勝手に決めてしまう傾向が強い。

各学年創意工夫して、社会問題、働くことなど、中学生向けの新聞記事を各階に掲示しています。



子供たちは親や先生など外側の声ばかりに押されて、自分の本当の声を聞かない癖がついている。本来、小さい子供というのは、あんな人になりたい、こんな人になりたいと、自分の心の底でつぶやくような声を持っていたはずである。

そして、この声こそ志の基調となる。しかし、ほかのコースを選べという外側の声が大き過ぎて聞こえなくなってしまうのか、いつの間にか声が出なくなってしまう。

しかし、エリートコースに漫然と乗っていればよい時代は過ぎ去りつつある。これからの社会は、自分の志を立てるよりほかに仕方がないんだと悟った人は、時々静かな時間を持って、自分の本音に耳を傾ける習慣をつけたい。

これはわざわざ何時間も取る必要はなくて、出勤や散歩の途中でもかまわない。そのうちにかすかなつぶやきが聞こえるだろう。最初はその声音は低くても、次第にはっきりと聞こえてくるはずだ。

<以上引用>

最近では、ニュースでもよく取り上げられますが、政府では「学び直しがいづでもできること」を政策の一つにしています。これは、一昔前までの、人間の寿

命より企業の寿命の方が長く、一旦入社すれば一生安泰とされた時代から、変化が激しく、企業の寿命より人間の寿命の方が長い時代となって、その他の課題も複雑に絡み合う中で、誰でもいつでも学び直しができ、人生をやり直していけるような社会に変えていくということです。生徒たちがこれから生きていく社会は、益々そのような社会になっていくことでしょう。

雑巾もいつも整然と管理します。



次号で述べますが、学校では「主体的に学習に取り組む態度」ということがこれまで以上に、非常に重要視されるようになり、通信票での評価項目ともなっています。ダーウィンは勉強ができませんでしたが、「自分が興味を持ったことは納得するまで追究するというねばり強さを持っていた」ということが述べられています。「主体的に学習に取り組む態度」の評価において、この「ねばり強さ」ということを重視することが国の方針になっています。学校を卒業し、先生という存在も自分の身のまわりにいなくなった人生の段階において、生涯学習社会を生き抜く重要な力が、自分の人生にとって必要なことを自ら獲得していこうとする「主体的に学習に取り組む態度」だと考えられているのです。

「ねばり強さ」というのは、人間の心や精神の働きですが、実はこのような心や精神に関係する力も「学力」として考えられています。そして、このような学力の捉え方は、世界的な潮流(世界標準)となっています。

一人一人の想いを付箋で貼り、見える化します。



次号では、より具体的に、「通信票」と「学力」について考えてみたいと思います。

平和学習の取組

7月に入り、生徒会担当や生徒会執行部が活動の中心となり、「平和学習」の活動が行われました。

この学習活動は、過去の日本が経験した戦争による惨禍を知り、紛争を解決したり平和に向けてどのようなことが大切なのかということを考えたりすることを目的としています。また、このような活動を通して、地域の歴史や戦時の状況についても触れ、先人が平和について尽力した姿や当時の思いを知ることで現在の「あたりまえ」の礎がどのように築かれてきたのかを学ぶことも目的としています。

■学習計画

- 7月3日～5日
平和週間として設定
- 7月4日
朝読書にて、共通資料を全校で読む。
※左は吉田空襲の資料
- 7月6日
全校放送による
平和集会



■学習資料の内容

- 昭和20年7月30日
富士吉田市を襲った吉田空襲について
- 昭和20年7月6日
甲府市を襲った甲府空襲について
- 昭和20年8月13日
大月市を襲った大月空襲について
- その他
犠牲になった方々の様子、当時の資料や写真など

かつて、学年主任として宿泊学習を企画・実施した折、東京在住ですが甲府市出身で、政府首脳や皇室といった方々の専用機の機長としてご活躍され、航空評論家もお務めであった方をお招きし、甲府市の宿舎で生徒たちに講話をしていただいたことがあります。

甲府空襲においては旧岡島デパート前の交差点の十字路が米軍機の空襲のための目印であったこと、自分は当時少年であったが、水の流れる細い側溝に横向きに寝転び、空襲を生き延びたこと、黒焦げになって横たわって亡くなっている人々の中の一人の身体の下にかろうじて焼け残った預金通帳(名前の部分のみ)があり、その遺体が母親であることがわかったこと、焼け残ったり

